

本校の SSH 事業の取組が 河合塾発行 全国版教育誌 『Guideline10月・11月号』に掲載されました！

本校の SSH 事業や探究活動や本校の進路指導について、河合塾発行の全国版教育誌『Guideline10月・11月号』に掲載されました！

全国から6校掲載されており、九州からは本校1校のみとなっています。

今回は探究 SSH 企画部と進路指導部とで取材を受け、本校の SSH 事業や探究活動を用いた総合型選抜や学校推薦型選抜の本校の状況について、2ページにわたる特集となっております。

今後も「最先端の学びを日本の西端から創造」できるように、全職員、全生徒で SSH 事業を推進していきたいと思えます。

掲載された記事の内容は、次ページに載せております。
なお、下記の URL から直接閲覧することは可能です。



【Guideline10・11月号トップページ】

<https://www.keinet.ne.jp/teacher/media/guideline/>

【大村高校の記事への直接リンク】

https://kawaijuku.meclib.jp/library/books/gl2025_1011/book/index.html#target/page_no=31

※河合塾の記事につきましては、無断で転載することを固く禁じます。



チャレンジ精神の源泉はSSHの探究学習

長崎県立大村高等学校

生徒の3分の1が希望

長崎県立大村高校は、江戸時代の藩校「集義館」を前身とし、明治17(1884)年に開校した伝統校である。同校は、普通科と家政科、そして、県内5校に設置されている文理探究科の3学科を備え、幅広い分野で進路実現をめざす地域の生徒の受け皿となっている。

大村高校では例年、地元長崎大や長崎県立大をはじめとする国公立大の合格者を輩出しているが、特筆すべきは、総合型・学校推薦型選抜にチャレンジする生徒が非常に多いことだ。進路指導主事の松田大輔先生によれば、近年、全卒業生の実に3分の1(100名前後)が総合型・学校推薦型選抜を使って進学するという。きっかけは、2018年度～2022年度と2023年度(～2027年度)のⅡ期連続でSSH(スーパーサイエンスハイスクール)指定校に採択された、同校独自の探究学習にある。

「文理探究科だけでなく、普通科・家政科を含む全学科の生徒が探究学習に取り組む点が、本校のSSHの特色です。SSHの学びを機に、自分が熱心に取り組んだ探究内容や課外活動の成果をアピールしたい、それで腕試ししたいという欲求が生徒に芽生え、文系・理系を問わず、チャレンジする生徒が徐々に増えていった。そして、合格者が始めると教員も生徒も自信に弾みがついてハードルが下がり、総合型・学校推薦型選抜にどんどんチャレンジしようじゃないか、という気風が学内で醸成されていった感があります」と松田先生は振り返る。

ワクワク感を重視する多様な探究プログラム

SSH指定第Ⅱ期に入った大村高校では、〈高度な科

学的思考力と豊かな発想力を持ち、新たな解の創発に向けて行動する人間〉の育成を目標に掲げ、「まず、体験してみる!」を合言葉に、探究に必要なスキルを身につけるさまざまな探究プログラムを実践している。入学後すぐに行われるコンテスト形式の「大高探究ビルディング」はその登竜門。何度か条件を変えながら新聞紙でタワーをつくり、班ごとに高さを競う。探究のおもしろさと奥深さに触れつつ、チームワークの大切さを学ぶプログラムだ。1年次前期では、データの集め方や読み方のノウハウを学ぶ「情報分析力育成講座」を実施。1年次後半では「ミニ課題探究」にチャレンジし、ポスター発表へとつなげていく。いずれも3学科共通のプログラムである。

文理探究科1年生はこれらの学びに加え、学校設定科目「サイエンス基礎」と「OMURA STEAM LABO」にも取り組む。特に東京学芸大・熊本大・長崎大・筑波大と同校が共同開発した後者は、データの使い方や仮説の立て方などを習得する一方、自身の「考えの型」や、周囲の人々の考え方を客観的にとらえる訓練として「哲学」も導入し、答えが1つでない課題に対して、皆で討議しながら探究する力を身につけていく。1年次から探究プログラムがみっちり詰め込まれているわけを、探究SSH企画部主任の川久保晃一先生は次のように説明する。

「1年生のうちにたくさんの体験を通して、探究の基礎スキルを注入しながら、『探究学習って楽しい!』『ワクワクするな!』と実感してもらいたい。その後は生徒の発達段階に応じて、2年次、3年次と順序立てて必要なプログラムを用意し、3年間を見通して探究の力を養っていく。そこが、本校のSSHの強みです。」

活動に対し、「もっと外部とつながりたい」という

表 大村高校SSHの特徴的な探究活動(抜粋)

本文中の活動以外にも、さまざまな大学・高校や研究機関・行政機関と連携した独自のプログラムを各学科で実施している。

ネクストジェネレーション・ミーティング

1年次

文理探究科

地元・長崎県の歴史的建造物「軍艦島」をテーマに、東京都の学校（東京学芸大附属国際中等教育学校、筑波大附属駒場高校）の生徒と共同で3日間、研修・協議を行う。

探究プラットフォームⅡA

2年次・3年次

文理探究科

課題探究を柱に、課題設定力と高度な科学的思考力、問題解決力、積極的に社会とかかわる姿勢と新たな解を創発する力を育成する。課題探究の成果は、県内5校の文理探究科による合同発表会で発表する。

- ・科学探究講座：大学での1日研修。マイコンボードを用いたプログラミングと測定・制御を中心に学ぶ。
- ・科学プレゼン研修講座：大学より講師を招聘し、効果的な科学プレゼンの方法について学ぶ。

探究プラットフォームⅡB

2年次・3年次

普通科

課題探究に取り組みながら、課題設定力と科学的・論理的思考力、問題解決力を育成する。

- ・広島大附属高校の生徒との交流：探究活動を通じて、両校の新しいテーマの班がオンラインで意見交換を行ったり、お互いの発表会にポスターを掲示したりする交流活動を行っている。
- ・大学セミナー：県内外の大学より10数名の講師を招聘して講義を実施し、学問への興味関心を高める。

探究プラットフォームⅡC

2年次・3年次

家政科

自らの学びや生活の中で、科学的な知識や見方、手法の有効性を認識し、積極的に活用する態度と、さまざまな情報を科学的かつ多角的に判断して行動できる力を育成する。

2年次では外部講師を招いたセミナーを9講座開講し、3年次は家庭科課題研究と連携する。

(セミナーの例) 生物、放射線、住居防災、食品、環境、課題発見、データ活用、スポーツ栄養 など

※学校提供資料を基に河合塾で作成

生徒の要望を受け、同校では「大村高校探究活動コンソーシアム」の構築も進めている。市役所と連携して地域イベントなどで成果を発表できる環境を整えるほか、地元の企業や連携協定を結ぶ県内3大学に、同校の探究活動をサポートする専用窓口を設けてもらい、生徒の活動の舞台を広げて探究の質を進化させたいとの狙いがある。

3年間の探究で培われる力が未来を拓く

そうした活動の積み重ねが功を奏し、前述したように、年々、探究活動の成果を生かし、総合型・学校推薦型選抜を突破する生徒が増えている。たとえば、在学中にゴキブリ類に関する研究に熱心に取り組んだ一昨年の卒業生のケースでは、学校推薦型選抜で鹿児島大農学部に進学してからもゴキブリ研究を継続。その専門性の高さが認められ、現在は大学生ながら鹿児島県立博物館の特別調査員として活躍中だ。また、直近の進学実績を見ると、筑波大生命環境学群（学校推薦型Ⅰ）、長崎大経済学部（総合型Ⅱ）、島根大総合理工学部（総合型Ⅰ）、北九州市立大文学部（学校推薦型Ⅰ）など、事例は枚挙に暇がない。同校では主に、教職員で行う3年次の志望校検討会を経て、生徒面談で最終の志望校選びを相談しているそうだが、総合型・学校推薦型選抜への出願を決めるにあたっては、

何を評価ポイントにしているのだろうか。

「リテラシーやコンピテンシーに関しては、アンケート調査を基にした本校独自のルーブリックで得た“生徒の主観”と、学びみらいPASSを活用した“客観的数値”を照らし合わせ、総合的に評価しています。そのうえで、志望大学に総合型・学校推薦型選抜がある場合は、もしかしたらこの子は、面接などで力を発揮するタイプかもしれないと判断し、生徒面談で指導したり、アドバイスしたりしています」と松田先生。SSH担当の観点から、川久保先生も次のように話をつなげる。

「私は、たとえば理学部の面接を受けるときに地域探究のことを話してもよいと思っているんです。自分はなぜこのテーマに興味を持ち、どんなプロセスで探究を進めていったか。途中で壁にぶつかったとき、どんな工夫をしてそれを乗り越えたのか。そして、探究を通してどんな力が身についたのか。そうしたプロセスを自分の言葉できちんと表現できれば、結果はおのずとついてくると思うのです。最初に総合型・学校推薦型選抜ありきではなく、まず探究の楽しさやプロセスを大切にほしい。うまくいかないときにあきらめずに試行錯誤する経験が、大学進学後や社会に出たときにきつと力になる。本校での3年間でそんな力を培うことができるように、今後もSSHの取組を進化させていきたいです。」